

当初の研究目的は、アメリカ合衆国考古学の歴史と方法論についての日本語の原稿を準備することであった。しかしながら、2022 年 11 月の教授会承認以来、様々な原稿の執筆が大幅に遅れ、そういった原稿の準備、執筆にアメリカ合衆国での 4 か月を費やすこととなった。

具体的には、以下の 4 本の原稿を完成させた。1)京都府福知山市所在奈良時代寺院址出土瓦の分析報告（2025 年 1 月に『京都府埋蔵文化財情報』に掲載予定）、2)アメリカ合衆国先史時代ミシシッピ文化における防御施設の地域的差異（2025 年 3 月に『待兼山考古学論集 IV』[大阪大学考古学研究室 35 周年記念論集]に掲載予定）、3)アメリカ合衆国先史時代の戦争に関する論文の和訳（2025 年 9 月刊行の『駿台史学』第 182 号に掲載済）、4)アメリカ考古学史の本の 1 章となる予定のカリフォルニア大学人類学史（2025 年 3 月に『図書の譜』第 29 号に一部掲載予定、残りは 2026 年 3 月に『図書の譜』第 30 号に一部掲載予定）。また 5)、ハーヴァード大学付属ピーボディー人類学博物館所蔵の日本考古資料の調査も行った。そのなかで、現在の茨城県美浦村陸平貝塚出土の縄文土器については、帰国後原稿を執筆開始し、2025 年 5 月刊行の『婆良岐考古』に報告予定である。

さらに、Routledge とすでに出版契約があって、昨年中には原稿執筆を終えておきたかった *S tate Formation in Early Japan*（古墳時代考古学の英文概説書）の原稿については、第 2 章「弥生時代」の大半を書き上げたところで、帰国となった。第 3 章以下については、帰国後、暇を見つけて少しずつ執筆を続けるしかない。

上記 1 は日本で収集・分析したデータをまとめただけであるので省略し、2、4、5 について成果を簡単に紹介する。

ミシシッピ文化は、定住化した農耕社会を基盤に社会の階層性が出現した、10～16 世紀に合衆国南東部で栄えた文化である。部族同士での戦争も頻繁に起こったようで、マウンド（墳丘墓・豪族居館の基壇・祭祀用の大規模な土盛りの総称）が築造された大規模集落は、防御柵で囲まれていた。例えば UNESCO 世界文化遺産に登録されている、ミシシッピ文化最大の遺跡であるカホキア Cahokia 遺跡や、ミシシッピ文化第 2 の遺跡であるアラバマ州マウンドヴィル M oundville 遺跡はその顕著な例である。

実は 2020～2023 年度の 4 年間、新学術領域研究（研究領域提案型）「出ユーラシアの統合的人類史学：文明創出メカニズムの解明」（研究代表：松本直子岡山大学教授）の A-03 班「集団の複合化と戦争」（班代表：松木武彦国立歴史民俗博物館教授）の北アメリカ担当の分担者を務めさせていただき、このテーマでの研究を深めていたところであった。英語の文献では、防御柵も含めて palisade という「防御施設」で一括りにされているが、詳細に見てゆくと、柵以外に、堤や周壕で囲まれていた集落もあった。特にミズーリ州南東部ではミシシッピ文化中・後期（13～16 世紀）に周壕で囲まれた集落が集中していたことがわかり、ミシシッピ文化の中の防御施設の地域的差異を見出すことができた。この知見は、ミシシッピ文化研究の第一人者であるメンフィス大学のデイヴィッド・ダイ David Dye 教授にも評価いただいた。

これに関連して、デイヴィッド・ダイ教授書下ろしの「北アメリカ大陸東部先住民の戦争と平和」と題したアメリカ合衆国先史時代における戦争のあり方・性格の時間的変遷に関する論文の和訳も、在外研究中に行ったのである。論文の内容は、狩猟採集民の単純な社会での暴力から、定住化した農耕社会での集団闘争、そして階層関係が出現したミシシッピ文化の社会における組織化された戦争という変化を、民族学的知見をフルに活用して跡付けたものである。

民族学的知見を考古資料解釈に導入することは、日本考古学においては抵抗感が強い。しかし、ミシシッピ文化やその前段階のウッドランド Woodland 中・後期（紀元前 200 年前後～紀元 10 世紀頃）、あるいは合衆国南西部（アリゾナ州・ニューメキシコ州）のプエブロ文化の遺跡から出土する遺物と、16 世紀以来の白人入植以降に知られた先住民の物質文化には顕著な共通性が見られるので、アメリカ人考古学者の解釈はそれなりに妥当性があると評価したい。

次に、今回の本来の合衆国滞在の目的であった北アメリカ考古学史の研究に関しては、カリフォルニア大学バークレー校で実践されてきた人類学の研究史を調べた。前述の通り、考古資料と民族資料の共通性から、アメリカ合衆国では考古学が民族学と一体になって発達してきたという経緯がある。したがって、アメリカ合衆国の考古学は歴史学ではなく人類学の一翼を成しており、日本とヨーロッパ諸国とは研究の枠組みが大きく異なる。どうしてこのように違ってしまったのかを理解するには、学史を繙くのが最善の方法であると認識している。そのため、前回の 2009 年度在外研究以来、『北アメリカ考古学史』（単著）の準備をしてきた。本は 2 部構成で、第 1 部は北アメリカ考古学の通史、特に北アメリカ考古学界で大きな役割を果たした研究者の紹介、第 2 部はアメリカ考古学界で大きな影響を及ぼした研究機関刊行の紀要の解説目録である。

今回の在外研究では、明治大学図書館が蔵書する、1903 年から 1964 年にかけて刊行された University of California Publications in American Archaeology and Ethnology 全 50 巻（1 巻で 1 冊のケースもあるが、各巻は 2～8 号から構成される）の解説目録（『図書の譜』第 29 号[2025]に掲載）と、主要な著者の学問的貢献（『図書の譜』第 30 号[2026]に掲載予定）を執筆した。カリフォルニア大学バークレー校人類学科を創設したのは、ハーヴァード大学人類学科初代主任教授であったフレデリック・パトナム Frederic Ward Putnam であったが、人類学科を率い、今日の基礎を作り、またこのシリーズを長い間編集してきたのは、アルフレッド・クローバー Alfred Kroeber であった。

クローバーについては伝記も出ているが、今回、主要な執筆者の学問的貢献を調べる過程で、新たな知見を得ることができた。それは、カリフォルニア州内の様々な先住民族の文化・言語が当時急速に失われつつあったことにクローバーが危機感を抱き、当時の人類学科大学院生の専門が考古学であっても、他地域の民族学であっても、カリフォルニア州内の民族学の報告を執筆するよう指導していたことである。

さらに驚いたのは、カリフォルニア大学バークレー校人類学科の学問的伝統が、私が学んだミシガン大学のそれと大きく異なっていたことである。1960～1970 年代、アメリカ合衆国考古学界で支配的であった「プロセス考古学」の柱の一つは、社会を、社会の諸側面が相互に関係しあっていると捉える「機能主義的人類学」であった。機能主義的人類学を奉じていた当時のミシガン大学人類学科はアメリカ合衆国考古学で指導的役割を果たしていたため、カリフォルニア大学人類学科でも同様に勝手に信じていた。

ところが、カリフォルニア大学バークレー校では、むしろ機能主義的人類学に否定的な立場をとっていた教員が複数いたことが今回わかった。またミシガン大学人類学科考古学専攻の基盤を築き上げたジェームズ・グリフィン James Griffin も、機能主義的人類学をあまり重視していなかったようである。以前は、グリフィンへの停年退職記念献呈論文集の、弟子による序文の中で、グリフィンはシカゴ大学大学院時代にイギリス機能主義的人類学の創始者ラドクリフ

＝ブラウン E. R. Radcliffe-Brown の授業を受けていた事実が記されているが、グリフィン本人の自伝的エッセイのなかで、シカゴ大学時代の恩師のなかにラドクリフ＝ブラウンをあげていないことに気づいた。むしろグリフィン、クローバーのように、理論家よりも事実の積み重ねを楽しんでいたようである。これは私にとってまったく新しい知見であり、自身の見方が狭かったことを痛感させられた。

最後に、大森貝塚を発掘し、近代日本考古学の父と評価されるモースがハーヴァード大学に寄贈した資料も、大森貝塚出土遺物ではなかったことが今回わかった。現在、ハーヴァード大学ピーボディー人類学博物館所蔵の大森貝塚出土資料を日本語で資料化・紹介する準備をしているところである。その過程で、ピーボディー人類学博物館の館蔵品受け入れ原簿を閲覧する機会を得た。大森貝塚出土資料の次の行に、^{おかだいら}陸平貝塚出土土器と書かれていることに気づき、土器片 24 片であるが、すべて実見、写真撮影する許可を特別にいただいた。地元の茨城県美浦村教育委員会ではこれらの資料の存在を把握していたそうであるが、まだ学会で公表されていないので、来年度前半に活字化の予定である。

こういった研究活動は帰国後の大学院教育に大いに役立っている。特に 2024 年度秋学期の大学院講義のテーマを「考古学史」としたため、カリフォルニア大学人類学史の原稿執筆や陸平貝塚出土資料の実見から得られた新しい知見は大いに役立った。また、考古学史の大学院講義は再来年度に実施したいと考えており、また来年度は兼任講師を務める中央大学大学院で考古学史を講じる予定である。

その他、今後の長期的展望としては、Routledge の本に加えて、上記 2 の原稿も含めて、私がこれまで発表してきたアメリカ考古学関係の論文を一書にまとめることと、上記 4 も含めて、アメリカ考古学史の本を完成させることである。アメリカ考古学関係の論文は一応揃っているが、古い論文の大幅は加筆修正が必要なのと、各章の序論と結論を書き直す作業が必要である。アメリカ考古学史の本については、1930～40 年代の章が手付かずであり、何とかしたい。